機械学習:レポート

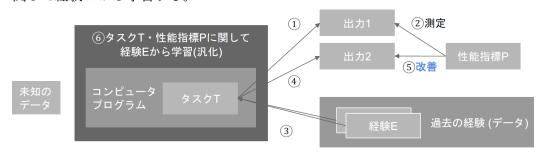
回帰問題:

ある入力(離散あるいは連続値)から出力(連続値)を予測する問題

- ・直線で予測する場合が線形回帰
- ・非線形(曲線など)で予測する場合が非線形回帰

機械学習:

トム・ミッチェルは著書「Machine Learning」にて下記のように記載している。 コンピュータプログラムは、タスク T(アプリケーションにさせたいこと)を性能指標 P で 測定し、その性能が経験 E(データ)により改善される場合、タスク T および性能指標 P に 関して経験 E から学習する。



また、機械学習の父とされるアーサー・サミュエルによる定義は下記となる。 明示的にプログラムしなくても学習する能力をコンピュータに与える研究分野

機械学習には主に下記2つの学習分類がある。

- ・教師あり学習
- ・教師なし学習

その他、教科学習、半教師あり学習なども聴くことがあるが、本章では上記2分類となる。

線形回帰モデル

- ・ざっくり比例
- ・回帰問題を解くための機械学習モデルの一つとなる。
- ・教師あり学習に属する
- ・ランキング問題は、回帰問題で解くべきではない。(密度比推定)

説明変数
$$\boldsymbol{x}=(x_1,x_2,\cdots,x_m)^T\in\mathbb{R}^m$$

目的変数

 $y \in \mathbb{R}^1$

- ・入力と m 次元パラメータの線形結合を出力するモデルとなる。(下記式)
- ・線形結合(入力とパラメータの内積)

パラメータ
$$oldsymbol{w}=(w_1,w_2,\cdots,w_m)^T\in\mathbb{R}^m$$

線形結合
$$\hat{y} = \boldsymbol{w}^T \boldsymbol{x} + w_0 = \sum_{j=1}^m w_j x_j + w_0$$

家賃予測モデルなどが線形回帰モデルとなる。

・データへの仮定 データは回帰直線に誤差が加わり観測されている。 (モデルで仮定した説明変数以外の要素も含めて誤差に表れる)

モデル数式

$$y=w_0+w_1x_1+arepsilon$$
 説明変数 別片 回帰係数 誤差

データの分割

モデルの汎化性能を測定するために必要

学習データと検証データが同一の場合未知のデータに対する精度がわからない。

- 学習用データ:機械学習モデルの学習に利用するデータ
- 検証用データ:学習済みモデルの汎化性能を測るための検証データ
- ・線形回帰モデルのパラメータは最小二乗法で推定
 - 平均二乗誤差(残差平方和) ・・・ 外れ値に弱い (データの確認要) データとモデル出力の二乗誤差の和

● 最小二乗法

学習データの平均二乗誤差を最小とするパラメータを探索

$$MSE_{train} = \frac{1}{n_{train}} \sum_{i=1}^{n_{train}} (\hat{y}_{i}^{(train)} - y_{i}^{(train)})^{2}$$

$$J(w) \qquad \qquad WT. \mathcal{L}_{i}^{(train)}$$

※ 線形回帰モデル (※ arg;条件に合う入力値)

$$\hat{\boldsymbol{w}} = \arg\min_{\boldsymbol{w} \in \mathbb{R}^{m+1}} \text{MSE}_{\text{train}}$$
 $\frac{\partial}{\partial \boldsymbol{w}} \text{MSE}_{\text{train}} = 0$

MSEを最小にするようなw(m次元)

MSEをwに関して微分したものが0 となるwの点を求める

上記式より、下記展開が行われる。

$$\Rightarrow \frac{\partial}{\partial w} \left\{ \frac{1}{n_{nrin}} \sum_{i=1}^{n_{nrin}} (\hat{y}_{i}^{(n_{nrin})} - y_{i}^{(n_{nin})})^{2} \right\} = 0$$

$$\Rightarrow \frac{\partial}{\partial w} \left\{ \frac{1}{n_{tr}} \sum_{i=1}^{n_{tr}} (x_{i}^{T} \cdot w - y_{i})^{2} \right\} = 0$$

$$\Rightarrow \frac{\partial}{\partial w} \left\{ \frac{1}{n_{tr}} (x_{i}^{T} \cdot w - y_{i}^{T})^{T} (x_{i}^{T} \cdot w - y_{i}^{T})^{2} \right\} = 0$$

$$\Rightarrow \frac{\partial}{\partial w} \left\{ \frac{1}{n_{tr}} (x_{i}^{T} \cdot w - y_{i}^{T})^{T} (x_{i}^{T} \cdot w - y_{i}^{T})^{T}$$

行列の微分で押さえておくべき式

$$\frac{\partial(w^{T}x)}{\partial w} = xC$$

$$\frac{\partial(w^{T}Aw)}{\partial w} = (A + A^{T}) \cdot xC$$

$$= 2AxC(A : \cancel{x} + \cancel{x} + \cancel{x} + \cancel{x})$$

線形回帰モデルのまとめ

回帰係数

$$\hat{\boldsymbol{w}} = (X^{(\text{train})T}X^{(\text{train})})^{-1}X^{(\text{train})T}\boldsymbol{y}^{(\text{train})}$$

予測値

$$\widehat{y} = \underbrace{X_{*}}\widehat{w} = \underbrace{X_{*}}\underbrace{(X^{T}X)^{T}X^{T}y}_{(m+1)\times 1}$$

$$\underbrace{n_{*}^{*}(m+1)\times 1}_{(m+1)}$$

$$\underbrace{(X^{*}_{1}\cdots X^{*}_{1}\cdots X^{*}_{1})}_{(m+1)\times 1}$$

※上記式の y(y ハットではなく)の左は射影行列

コード演習 (線形回帰モデル:skl_regression.ipynb)

線形回帰モデル-Boston Hausing Data-

```
1 # 単回場の回帰係数と切片を出力
2 print('推定された回帰係数: %.3f, 推定された切片: %.3f' % (model.coef_, model.intercept_))
3
4 for i in range(1, 10):
5 price=model.predict([[i]])
6 print("Room = ",i,"子測値 = ",model.predict([[i]]))

推定された回帰係数: 9.236, 推定された切片: -35.481
Room = 1 子測値 = [-26.24530478]
Room = 2 子測値 = [-7.77410186]
Room = 3 子測値 = [-7.77410186]
Room = 4 子測値 = [1.4814983]
Room = 5 子測値 = [19.38270302]
Room = 7 子測値 = [19.38270302]
Room = 7 予測値 = [29.18830459]
Room = 8 子測値 = [38.40330615]
Room = 9 子測値 = [47.63950771]
```



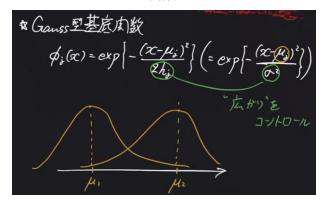
予測結果は上記となり、4部屋以下ではマイナス予測となる結果。 これは、Boston Hausing Data で RM の最小が 3.561 部屋となるため。

| [16] | 1 df.de | escribe() | | | | | | _ | | | | | | | | |
|------|---------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|---|
| | | CRIM | ZN | INDUS | CHAS | нох | RM | AGE | DIS | RAD | TAX | PTRATIO | В | LSTAT | PRICE | % |
| | count | 506.000000 | 506.000000 | 506.000000 | 506.000000 | 506.000000 | 506.000000 | 06.000000 | 506.000000 | 506.000000 | 506.000000 | 506.000000 | 506.000000 | 506.000000 | 506.000000 | |
| | mean | 3.613524 | 11.363636 | 11.136779 | 0.069170 | 0.554695 | 6.284634 | 68.574901 | 3.795043 | 9.549407 | 408.237154 | 18.455534 | 356.674032 | 12.653063 | 22.532806 | |
| | std | 8.601545 | 23.322453 | 6.860353 | 0.253994 | 0.115878 | 0.702617 | 28.148861 | 2.105710 | 8.707259 | 168.537116 | 2.164946 | 91.294864 | 7.141062 | 9.197104 | |
| | min | 0.006320 | 0.000000 | 0.460000 | 0.000000 | 0.385000 | 3.561000 | 2.900000 | 1.129600 | 1.000000 | 187.000000 | 12.600000 | 0.320000 | 1.730000 | 5.000000 |] |
| | 25% | 0.082045 | 0.000000 | 5.190000 | 0.000000 | 0.449000 | 5.885500 | 45.025000 | 2.100175 | 4.000000 | 279.000000 | 17.400000 | 375.377500 | 6.950000 | 17.025000 | |
| | 50% | 0.256510 | 0.000000 | 9.690000 | 0.000000 | 0.538000 | 6.208500 | 77.500000 | 3.207450 | 5.000000 | 330.000000 | 19.050000 | 391.440000 | 11.360000 | 21.200000 | |
| | 75% | 3.677083 | 12.500000 | 18.100000 | 0.000000 | 0.624000 | 6.623500 | 94.075000 | 5.188425 | 24.000000 | 666.000000 | 20.200000 | 396.225000 | 16.955000 | 25.000000 | |
| | max | 88.976200 | 100.000000 | 27.740000 | 1.000000 | 0.871000 | 8.780000 | .00.000000 | 12.126500 | 24.000000 | 711.000000 | 22.000000 | 396.900000 | 37.970000 | 50.000000 | |

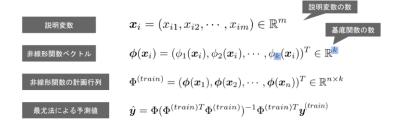
非線形回帰モデル

複雑な非線形構造を内在する現象に対して、非線形回帰モデリングを実施

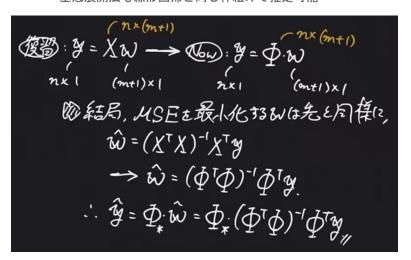
- ·基底展開法
 - 回帰関数として、基底関数と呼ばれる既知の非線形関数とパラメータベクトルの 線型結合を使用
 - 未知パラメータは線形回帰モデルと同様に最小2乗法や最尤法により推定
- ・よく使われる基底関数
 - 多項式関数
 - ガウス型基底関数



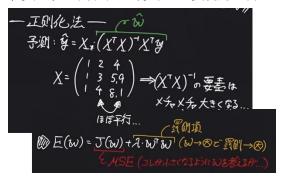
非線形回帰モデル



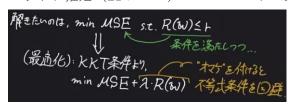
基底展開法も線形回帰と同じ枠組みで推定可能



- ・未学習(underfitting)と過学習(overfitting)
 - 学習データに対して、十分小さな誤差が得られないモデル→未学習 (対策)モデルの表現力が低いため、表現力の高いモデルを利用する
 - 小さな誤差は得られたけど、テスト集合誤差との差が大きいモデル→過学習 (対策 1) 学習データの数を増やす
 - (対策2) 不要な基底関数(変数)を削除して表現力を抑止
 - (対策3) 正則化法を利用して表現力を抑止



正則化項 (罰則項) の役割は



正則化の効かせ方はハイパーパラメータとなる。

・ホールドアウト法 ・・・ 1回のみ精度検証 有限のデータを学習用とテスト用の2つに分割し、「予測精度」や「誤り率」を 推定する為に使用

※欠点:データが少ない場合に、外れ値にモデルがフィッティングするケース。

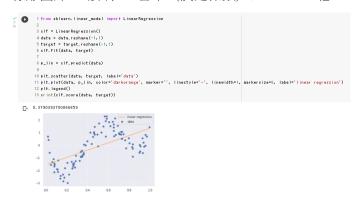
・クロスバリデーション(交差検証) ・・・ 分割分精度検証がある



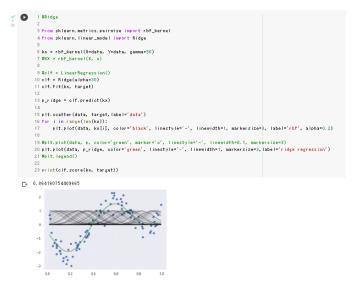
・グリッドサーチ ハイパーパラメータの候補を用意し、全ての組み合わせで評価値を算出

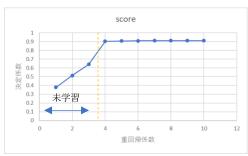
コード演習(非線形回帰モデル:skl_nonlinear regression.ipynb)

線形回帰の場合、正答率(決定係数)は 0.379 と低い



非線形回帰(リッジ推定 $\alpha = 30$ あり)の場合、正答率は 0.864





線形回帰では表現できない回帰が非線形回帰では可能となっている。 ※モデル表現は適切な設定が必要となる。

ロジスティック回帰モデル

分類問題(クラス分類)ある入力(数値)からクラスに分類する問題

識別的アプローチ:
$$P(C_k|x) \in \overline{b} \notin model / C_{\delta}$$
生成的アプローチ:
$$P(C_k) \in p(x(C_k) \in model / C_{\delta}, \in nodel / C_{\delta},$$

参考文献:

分類で扱うデータ入力(m次元のベクトル)出力(0 or 1)

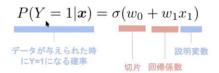
説明変数
$$oldsymbol{x}=(x_1,x_2,\cdots,x_m)^T\in\mathbb{R}^m$$
目的変数 $oldsymbol{y}\in\{0,1\}$ のか1

目的変数は 0/1 に対し、入力は実数のためシグモイド関数などを用い、 $0\sim1$ へ圧縮する。

・シグモイド関数 入力は実数・出力は必ず 0~1 の値(確率を表現できる) シグモイド関数の微分は、シグモイド関数自身で表現することが可能

$$\sigma(x) = \frac{1}{1 + \exp(-ax)}$$

・シグモイド関数の出力を Y=1 になる確率に対応させる



データY は確率が0.5 以上なら1、未満なら0 と予測するのが一般的 求める精度により 0.5 は調整する。

- ・最尤推定
 - ベルヌーイ分布

$$Y \sim Be(p)$$
 $P(y) = p^{y}(1-p)^{1-y}$

· 最尤推定

1回の試行で $P(y) = p^y (1-p)^{1-y}$: 既知 : 未知 n回の試行で1-ynが同時にこる確率(p固定) $P(y_1,y_2,\cdots,y_n;p)=\prod_{i=1}^n p^{y_i}(1-p)^{1-y_i}$ $P(y_1, y_2, \dots, y_n; p) = \prod_{i=1}^{n} p^{y_i} (1 - p)^{1 - y_i}$

尤度関数を最大化するようなパラメータを選ぶ推定方法

そこを解決するために log をとっている。また、対数をとると微分の計算が簡単

$$E(w_0, w_1, \dots, w_m) = -\log L(w_0, w_1, \dots, w_m)$$
$$= -\sum_{i=1}^n \{ y_i \log p_i + (1 - y_i) \log(1 - p_i) \}$$

確率は0~1と小さいため、複数かけると0に近くなる。

・ロジスティック回帰モデルの学習

対数尤度関数をパラメータで微分して0になる値を求める(解析的に求めることは困難)

● 勾配降下法 (Gradient descent) 学習データをまとめて反復学習により逐次更新するアプローチ ηは学習率と呼ばれるハイパーパラメータ(収束しやすさを調整)

$$w^{(k+1)} = w^{(k)} + \eta \sum_{i=1}^{n} (y_i - p_i) x_i$$

● 確率的勾配降下法(SGD) データを一つずつランダムに(「確率的」に)選んでパラメータを更新

$$\boldsymbol{w}(k+1) = \boldsymbol{w}^k + \eta(y_i - p_i)\boldsymbol{x}_i$$

コード演習 (ロジスティック回帰モデル:skl_logistic_regression.ipynb)

1. チケット価格から生死を判別

 $predict_proba(X)$: [データ数]行 × [次元数]列の特徴量行列 X を引数にして、 各データがそれぞれのクラスに所属する確率を返す

```
√ [63] 1 for i in range(0,10):

            predic_val1 = model.predict([[i]])
3 # predic_val2 = model.predict_proba([[i]])
           4 print(f'{predic_val1}')
           [0]
          [0]
          [0]
[0]
          [0]
           1 for i in range(0,10):
           2 # predic_val1 = model.predict([[i]])
3 predic_val2 = model.predict_proba([[i]])
            4 print(f'{predic_val2}')
           [[0.7193658 0.28063421]
           [[0.71628772 0.28371228]]
           [[0.71318934 0.28681066]]
          [[0.71007081 0.28992919]]
[[0.70693231 0.29306769]]
           [[0.70377401 0.29622599]]
[[0.70059609 0.29940391]]
           [[0.69739873 0.30260127]]
          [[0.69418214 0.30581786]]
[[0.6909465 0.3090535]]
```

predict では 0/1 分類結果となるが、predict_proba では 0/1 分類の確率が返り値となる。



確率 0.5 にて予測が 0/1 切り替わる。

主成分分析

変数間に相関があるデータに対して有効な、変数削減手法となる。 多変量データの持つ構造をより少数個の指標に圧縮

- 変量の個数を減らすことに伴う、情報の損失はなるべく小さくしたい
- 少数変数を利用した分析や可視化(2・3次元の場合)が実現可能

具体的な対応は、情報の量を分散の大きさと捉え、分散最大方向を射影軸として探索する。

条件付き最適化問題を解く

● ノルムが1となる制約を入れる(制約を入れないと無限に解がある)

目的関数 $rg\max_{m{a}\in\mathbb{R}^m} m{a}_j^T Var(ar{X})m{a}_j$ 制約条件 $m{a}_j^Tm{a}_j=1$

● ラグランジュ関数を最大にする係数ベクトルを探索(微分して 0 になる点) 分散共分散行列の固有値と固有ベクトルが、制約付き最適化問題の解となる



○ 射影先の分散は固有値と一致

$$Var(\mathbf{s}_1) = \mathbf{a}_1^T Var(\bar{X}) \mathbf{a}_1 = \lambda_1 \mathbf{a}_1^T \mathbf{a}_1 = \lambda_1$$

コード演習 (PCA モデル: skl_pca.ipynb)

○ 乳がん検査データを利用しロジスティック回帰モデルを作成

Train score: 0.988 Test score: 0.972 Confustion matrix: [[89 1] [3 50]]

○ 主成分を利用し2次元空間上に次元圧縮

X_train_pos shape: (426, 2) explained variance ratio: [0,43315126 0.19586508] Text(0, 0.5, 'PD 2')

Text(0, 0.5, 'PD 2')

22.5

30

22.5

30

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

-2.5

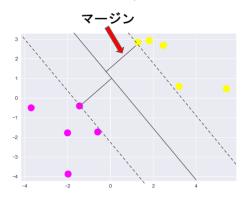
-2.5

-2.5

-2

サポートベクターマシン

サポートベクターマシンはデータからできるだけ離れた線形判別関数 (決定境界) を求める → マージン最大化 (マージンをパラメータに依存する関数として表現している。)



・目的関数の導出(準備)

各クラスのデータをwの方向kへ射影した点w軸に座標を変換線形判別関数のマージンを κ とした時に全てのデータ点でなりたつ条件

$$\mathbf{w}^{T}\mathbf{x} + b \qquad |\mathbf{w}^{T}\mathbf{x} + b| \ge \kappa$$

$$\mathbf{w}^{T}\mathbf{x} + b = 0$$

$$\mathbf{w}^{T}\mathbf{x} + b = 0$$

$$\mathbf{w}^{T}\mathbf{x} + b \ge \kappa$$

Wが決まればマージンが決まる。

マージンとは決定境界と最も距離の近い点との距離なので、

$$\min_i \frac{t_i(\boldsymbol{w}^{\mathrm{T}}\boldsymbol{x}_i + b)}{||\boldsymbol{w}||}$$

SVM はマージンを最大化することを目標なので目的関数は

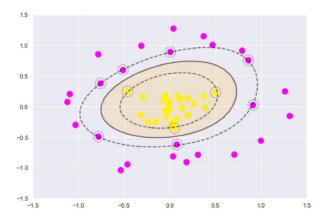
$$\max_{\boldsymbol{w},b}[\min_i \frac{t_i(\boldsymbol{w}^{\mathrm{T}}\boldsymbol{x}_i + b)}{||\boldsymbol{w}||}]$$

- ・ハードマージン SVM
 - マージンの内側にデータが存在することを許容しない
- ・ソフトマージン SVM
 - サンプルを線形分離できないときに使用
 - 誤差を許容し、誤差に対してペナルティを与える
- 非線形分離
 - 線形分離できないとき
 - 特徴空間に写像し、その空間で線形に分離する
- ・カーネルトリック
 - カーネル関数を使用し、高次元ベクトルの内積をスカラー関数で表現

$$k(\boldsymbol{x}_i, \boldsymbol{x}_j) = \phi(\boldsymbol{x}_i)^{\mathrm{T}} \phi(\boldsymbol{x}_j)$$

- 特徴空間が高次元でも計算コストを抑えられる
- ・非線形カーネルを用いた分離
 - 放射基底関数カーネル(RBF カーネル・ガウシアンカーネル)

$$k(oldsymbol{x}_i, oldsymbol{x}_j) = \exp{(-rac{||oldsymbol{x}_i - oldsymbol{x}_j||^2}{2\sigma^2})}$$



元データを高次元からの射影だと考え高次元な空間で決定境界を得る。

参考文献

機械学習のエッセンス(加藤 公一) ※E 資格の範囲と一致しているとのこと。 見て試してわかる機械学習アルゴリズムの仕組み 機械学習図鑑(秋庭 伸也ほか)